烈濤編 P13~14,74~78,
120~127,149~153,172~184,
187~255　烈濤編 P79~87

③ 中岳火口、火山博物館

『火口付近は草木もなく、荒涼とした砂漠のような風景が拡がる。普段は観光客でにぎわうそこも、いまは生き物の気配すらない。ただ火口から聞こえるゴーゴーという不気味な音が、荒んだ風景をいっそう恐ろしげな姿に見せる。』
『中岳の最高地点は火口の東側半分を取り囲む外輪山上にあり、標高は 1520M 。この外輪山は古い時代の火口壁の一部で、現在の火口はそれより 200M 低いところ、山の中腹にある。火口の南側は「砂千里」と呼ばれる旧火口原だ。たびかさなる噴火とガスであたりには草木は生えず、大小の火山岩や火山礫がゴロゴロ転がる光景は殺伐としており、火の山の険しい一面をまざまざと見せつけている。
頂上から見下ろせる火口は、篝火とライトのせいでひときわ明るく、まるで芝居の舞台を上から見ているようだ。』
『両者の正式な対面は、本陣近くの博物館の建物内で行われた。南面のテラス状の窓の向こうには茫漠たる草千里の風景が拡がる。』

中岳は、「火輪の王国」ラストステージ。
火口付近は火山ガスが立ち込めることがあるので、ロープウェイ乗り場から火口まで行けるかは運次第。
ロープウェイ駅から火口までの約１キロ、標高差 100Ｍある道は、直江がかけのぼったところ。
火山博物館は、上杉と大友の会談の場。

後編 P198~200,
烈風編 P27~30,143~154
烈濤編 P15~24

④ 西巌殿寺

『阿蘇駅前を右に入ると、草千里へと続く道路の入口に、目指す西巌殿寺はあった。
（中略）車は西巌殿寺に到着した。ふだんはあまり人気もない寂れた本堂は明かりがたかれ、まつりでもあるのかと思うほど人がいた。
車から降り立つと迎えの者が出てきて案内をした。立派な杉並木の石段を登って行ったところに本堂はある。全体が黒身を帯びた、いかにも年代古い建物だ。
正面から見るとそう大きくはないが意外に奥行があって、中では法要のようなものが行われている。
八海が車イスを押して、かがり火のなかを進んでいくと、家臣らが出迎え、堂の奥から少年を伴なった中年男性が現れた。』

大友方の、阿蘇本陣があった場所。
本堂は、残念ながら数年前に焼失。
本堂跡へは、車イス用の（？）車で本堂近くまで乗りつける裏道）と、杉並木と長い石段がある表ルートがあります。
（多人数なら、本堂から階段を降りている間に、運転手が車を下にまわしてもいいかと）